



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ユダヤ人であることと「ゲイ」であること : プルーストの同性愛意識                                                   |
| Author(s)    | 原田, 武                                                                               |
| Citation     | études françaises. 1994, 28, p. 1-23                                                |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/93703">https://hdl.handle.net/11094/93703</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ユダヤ人であることと「ゲイ」であること

## ——プルーストの同性愛意識——

原 田 武

### 「呪われた種族」

三島由紀夫は小説『禁色』のなかで、男色者をユダヤ人にたとえる。彼らが共同の呪われた利害で結ばれ、いつか自分たちの至福の時代が来ることを執拗に夢に見つづける、その「辛抱強さに匹敵するものとしては、猶太民族以外には考えられない」というのだ。それに、「一個の辱められた観念に対する異常な執着の度合においても、この種族は猶太人に似ている」<sup>1)</sup>。ジャン・コクトーもまた、その匿名の手記『白書』で、「ユダヤ人がユダヤ人を見分けるように、男色家は男色家を嗅ぎつけるものだ。仮面をつけていても見破れるものだ」<sup>2)</sup>と書く。

世にある同性愛者を「呪われた種族」としてユダヤ人になぞらえる発想は、とくに西欧において両者が平行して長いあいだどれほど差別と迫害をこうむってきたかを考えると、誰の心にも自然に浮かぶものであろう。ミッシェル・フーコーは同性愛者を嘘つき呼ばわりする無意味さを、ユダヤ人を高利貸し扱いにするそれと同じだとみなした<sup>3)</sup>。「ユダヤ人とゲイ・ピープルの辿った運命は、初期キリスト教徒による迫害から強制収容所における大量虐殺に至るまで、ヨーロッパ史を通じてほとんど軌を一にしているのである」とは、大著『キリスト教と同性愛』の著者ジョン・ボズウェルの言葉である。「ユダヤ人を虐殺したその法律はゲイ・ピープをも虐待した。ユダヤ人排斥に専念したその集団は同性愛をも一掃しようと努めた。ヨーロッパ史上、ユダヤ人の独自性を許容することのできなかった

たその時代は性的な反体制にも激しく反対した」<sup>4)</sup>のである。

ユダヤ人も同性愛者も、正統キリスト教の支配する西欧社会においては、どうしても胡散臭く、その秩序になじみにくい存在とみなされてきた。問題は、宗教とセクシュアリテという、人間にとって抜き差しならない二つの「絶対」の追求にかかわっているのだ。宗教のためにも、肉欲のためにも、人間は命を賭ける。その集中の度合いが激しい分だけ、多数者と違って、ユダヤ教を奉じる者や、同性への欲望に専念する者は、潜在的な秩序破壊者である。両者は社会の非協力分子であり、何やら不可解にして無気味な、秘密結社のメンバーなのだ。ユダヤ人には国家への帰属意識も忠誠心も乏しい。同性愛者は家族制度からはみ出し、人類の再生産にも参加しない。ユダヤ教徒のもっとも簡単な指標となる「割礼」という宗教実践にしながら、フロイトふうにいえばまがまがしい「去勢不安」を刺激し、強いカルチャー・ショックを与えずにはいない。

中世の昔にあっては、ユダヤ人、男色者、異端者の三者は同じ資格で排除されるべき存在であった。当時、異端者が告発されたのはしばしば鶏姦の疑いによる。ひとしく神に嘉されない彼らは、一種の観念連合を誘う、切り離しにくいセットを形成していたのである。

今日においても、同性愛者への差別意識は必ずしも消えていない。何ら根拠のない嫌悪感から同じ社会に住む人たちを仮想敵扱いにするのであるから、ゲイへの差別は人種差別とまったく同じ心性に発することがわかる。

## ユダヤ人にしてゲイ

周知のようにプルーストはまず間違いなく同性愛者でもあり、また母によってユダヤの血を引いていた。そんな彼が同性愛について語るとき、(半)ユダヤ人の意識が加わるのは止むをえぬ成り行きであろう。小説で初めて本格的にこのテーマが表面に出るあの『ソドムとゴモラ』の第1部、有名なシャルリュスとジュピアンの出会いの場面においても、プルーストはし

ばしばユダヤ人を引き合いに出す。

題名が示すとおり、同性愛者とはすなわち神の怒りの火をかりうじて免れた先祖の末裔である。ユダヤ人同様世界に離散して、あちこちにコロニーを作り、身分を隠してもっとも閉鎖的なクラブに潜入したりもする(Ⅲ, 33)。だが、これもまたユダヤ人同様、彼らは一種の嫌悪感からおたがいに同類者を避け、ときにはうまく出自を隠している仲間の仮面を引き剥がすような屈折した行動に出ることもあるのだ(Ⅲ, 18)。

シャルリュス男爵の出現は文学の風景を一変させた、とフランソワ・ポルシェはいう。彼によれば『ソドムとゴモラ』第1部の出版は、オスカー・ワイルドの有罪判決のあと二十数年後に公布された「非順応主義者のナントの勅令」にも相当するのだ<sup>5)</sup>。だがこの記念碑的なページの奥のほうで、二重に負い目を背負った男の悲痛な呻きがいつも鳴り響いているのが聞こえる。プルーストが「ロッジに集うフリーメーソンよりもっと広汎、機能的で人に隠れた組織」とか、「自然なまたは約束による合図、無意志的なまたは意図的な合図で、ただちにそれと認めあう」(Ⅲ, 18-19)仲間たちとかいう言い方をするとき、同性愛者を指すのかユダヤ人のことか区別がつきにくい。どちらも、「虚言や偽誓のなかに生きなければならない」「一つの呪いを受けた種族」(Ⅲ, 16)の苦しさ、あるいは罪悪感のなかのなかで一体となるように感じられる。

『ソドムとゴモラ』第1部に関する限り、プルーストもまた、ユダヤ人と同様、同性愛の人たちは社会のなかで別種の不穏な「隠れた集団」を形づくるのだという、同性愛排除のための昔からの言説に依拠していることがわかる。「健全な」ほかの人たちと共通の価値基準を持たない性的アウトローは、社会の一体性を損ねる。欲望の統制は国家の重要な任務の一つである。古代ギリシアにおいては、ゲイのカップルからなる軍隊は勇敢に戦うと信じられていた。たがいに武勲を競い合うから、士気が高まったという<sup>6)</sup>。だがゲイは国家への奉仕より自己の欲望を優先させるかもしれず、

ともに戦うべき仲間を欲望の目で見ることもありうる。昔からよく嘘と裏切りは同性愛者につきもののようになれる。軍隊における規律維持にとりわけ心を砕いたドイツ帝国初代の宰相ビスマルクは、「同性愛は国家にとってきわめて重大な脅威となる。社会階級間の柵を取り払ってしまうからだ」と考えていた<sup>7)</sup>。

とりわけ西欧社会でゲイが嫌われてきたのは、何となくいやらしいとか、彼らがえてして「マザコン」に映るからだけではない。彼らによって社会の仕組みが覆されることの懸念のほうがむしろ大きい。オスカー・ワイルドが厳しい裁きを受けたのも、要は彼が下賤な青年たちに高級ホテルでしたい放題のことをさせたからであった。『失われた時を求めて』をざっと見渡しても、男色の関係はたいていの場合階級差の乗り越えから成り立つ（早い話、問題の『ソドムとゴモラ』第1部では、フランス切っての大貴族シャルリュスがもとの仕立屋ジュピアンと交わる）<sup>8)</sup>。「同性愛即社会制度の無視」の思想にあながち根拠がなくはないのだ。ナチス・ドイツはユダヤ人と並んで同性愛者に迫害を加えた。ゲイへの偏見がすっかり緩んだ現在においてすら、アメリカのクリントン政権は同性愛者を軍隊に受け入れることに依然ためらいがちなのだ。

同性への欲望は人の目に隠れている分だけ自由に、社会や国家の隔てを超えて飛びかうのであろう。社会の枠組みを無視することが欲望への刺激となり、「倒錯」的な喜びを高めるのかもしれない。「同性愛の国際組織」が存在すると真面目に論じた本があるという<sup>9)</sup>。いうまでもなく、古来ユダヤ人に浴びせられる最大の非難は、国家の軽視、国を超越した自分たち自身の利益の擁護である。

### 隠さねばならぬもの

恋愛感情において十九世紀文学の主たるテーマが「姦通」であったとすれば、世紀末には「倒錯」が浮上してきたといわれる<sup>10)</sup>。両性具有の主題

はブルーストが生きた世紀末のはやりであり、これと並んで同性愛も芸術の一つのテーマになろうとしていた。直接・間接にゲイを扱った文学作品もけっして少なくはない<sup>11)</sup>。

だが、出る杭は打たれる。風俗になろうとすればするほど、反動も大きくなる。芸術家の意識と一般人の反応は大いに異なる。ブルーストが生きたのはまた、1985年のオスカー・ワイルドの有罪判決につづいて、1902年にはドイツの有力な武器商人クルップの自殺、1906年、これもドイツの貴族にして外交官オイレンブルクの事件など<sup>12)</sup>、スキャンダラスな出来事が相次いで起こった時代でもあった。作品のなかであれほど大胆にゲイたちを描いたみせたブルーストも、ジードに向かって、今日ジードの『日記』で読めるような思い切った告白をした以外は、自分の性癖を認めたことは絶えてなかった。自伝的要素を多分に含んだその小説『失われた時を求めて』においても、主人公「私」はユダヤ人でもなく同性愛者でもない<sup>13)</sup>。

ジードが『コリドン』でやったように、同性愛を男らしさの育成というギリシア的な慣習に結びつければ、まだいくらかは世間の通りはよかったかもしれない。ジードはうまく当時の反ユダヤ主義の言説に乗って、ユダヤ的な風俗の弛緩に対抗すべきヨーロッパ本来の男色を擁護したのだった<sup>14)</sup>。だがブルーストには、ユダヤの出自を裏切ることができなかった。彼の同性愛の形態もまた、ジードのそれとは趣を異にしていた。

十九世紀末から今世紀の初めにかけて、フランスにおいては、反ユダヤ主義が胸を張って主張されるいわば公認の思想であったことを、ここで思い出しておかねばならない。ユダヤ人が表象するのは、「土地喪失、流通する貨幣、流謫、私利私欲、神との直接の接触、つまりあらゆる手段を介しての国家からの離脱」なのだ<sup>15)</sup>。レオン・ブロワのような純粋なカトリック信仰に燃えた人でさえ（むしろそうであるからこそ）、「現代のユダヤ人は世界中の醜悪なもののすべての合流点」だといい放った<sup>16)</sup>。さらにミッシェル・フーコーの言葉によれば、十九世紀の終りにおいて「ユダヤ人

たちは必然的に変質・退廃した者たちである。第一に彼らは裕福であり、第二に彼らはおたがい同士で結婚し、常軌を逸した性的実践そして宗教実践を持っている。したがって、われわれの社会において、変質＝退廃をもたらすのは彼らなのだ」<sup>17)</sup>。

こんな言い方がはびこるなかで同性愛をユダヤ的なものに結びつけることは、それだけでなくいとおしい同性愛に、ことのほか汚辱にみちた衣装をまとうせることでしかない。プルーストが嘘をつかねばならない条件は、十分すぎるくらい揃っていたのである。

### 罪責感から正当化へ

自己の性癖を一貫して否認しつづけたプルーストは、そのユダヤ的血筋についても率直であることはできなかった。むしろ彼がドレフュス事件に積極的にかかわったという事実は忘れてはならない。けれども、とくに若いころの彼にはことさらもっとも反ユダヤ的なサロンに好んで近づこうとする面があった。そこで交わされる反ユダヤ的な言辞にも、彼は憤激ばかりに終始したのではなかった<sup>18)</sup>。何と云っても彼は、作品のなかでユダヤ人ブロックを、あれほど軽薄なスノップとして描き出したのである。

当時のフランスにおいて、ユダヤの血を引きかつゲイであるという二重の負担は私たちが思う以上に大きい。そこから、後ろめたさと疎外の意識、言動における二重性が生まれ出てもむしろ当然なのだ。

だが、考えてみれば、自分の血筋も欲望も、本人には責任のないことなのである。子は親を選ぶことができず、欲望の形態もまた、容易に自分の意志で自由になるものではない。自分に責任のないことだからこそ苦しみが深くなるということも確かにある。しかし、責任のとりようがなければ開き直るしかないと思ひ定める道も残されている。プルーストが罪責感から完全に自由になったとは思えない。だが彼は、開き直りあるいは正当化への道にも踏み出したのだった。

同性愛者を「ソドムの民」ととらえる種族の意識が、まず彼の支えとなることができる。太古からの先祖伝来の罪だとすれば、個人の責任は薄らぐ。欲望は集団への帰属の問題になってしまう。

実際、プルーストには同性愛のとらえ方においてユダヤ人同様の種族の意識がとても強いように感じられる。彼にとって同性愛者とは、一種の「ディアスポラ」によって世界にちりぢりになり、どこでも異邦人扱いにされて同化できず、上目遣いで相手が敵か味方かを見定めながら、いつか祖国への復帰の日がくることを夢見ている人たちなのだ。「望郷的な、偽善的な、ときには勇敢なソドムの亡命者たち」によって、「それぞれの町、それぞれの村で、離散したメンバーを集めて聖書の都市を再建しようとする」努力が行なわれているのだ（Ⅲ、245-246）。

ユダヤ人との重ね合わせでゲイをとらえるこんな見方のなかには、悲痛さと同時に一種の連帯感情もある。ユダヤ人のシオニズムと同じものがゲイたちにもあるのなら、個人の苦しさはずいぶんと和らぐであろう。

同性愛の人々を集団扱いにする傾向は、彼らを異質化し、まるで別種の人類のようにみるところにまでいく。アルベルチーヌの本性と旧悪が否定しようもなく露呈してしまった日、話者は彼女が白鳥ででもあるかのように「別の人間」なのだと感慨を抱く。彼女は「奇妙な種族（une race étrange）」に属しているのであって、この種族は一般の人類に「混じりあい、身を隠し、けっしてそれと溶け合わない」のだ（Ⅳ、107-108）。別種の人類に属するからには、そこに身を置く限りにおいて、どんな倒錯した欲望であってもいささかも「異常」ではなくなる理屈であろう。

さらに、プルーストが遺伝・家系・病気といった、個人のうちにあって個人の意志から無関係の要素に、強い関心を抱いていたことを思いあわせる必要がある。彼はともすれば同性愛の原因を遺伝に求めたがるように思え、『消え去ったアルベルチーヌ』の終りのあたりで同性愛を語るところ（Ⅳ、265）など、この原因を既定の事実として話を進めているように

読める<sup>19)</sup>。また彼にとって、同性への欲望は神経にかかわる一種の病気でもある。『楽しみと日々』に収録されなかった小篇「夜のまえに」(1893)は彼の同性愛意識を探るうえで貴重な資料であるが、そのなかで「その種の愛の原因」を「神経の変質 (une altération nerveuse)」<sup>20)</sup> に認めているのが注意をひく。しかも「もっぱらそれだけだから、道徳的内容は含まれないのだ」と、彼は言葉をつぐのである。

同性愛を一つの病気をみることを、彼はもしかして当時よく読まれていたクラフト・エビングの著作から受け継いでいるのかもしれない。このドイツの性科学者にとっても同性愛は病理学的に扱うべき神経的な欠陥であった。プルーストは自分が「病気」だと知って、不安になっただろう。しかしそれは彼を、いくらか安心させただろう。

オスカー・ワイルドは「遺伝とは名前のわかる唯一の神である」と、はなはだ適切な警句を吐いた。遺伝にしても病気にしても、人が抵抗の余地なく受け入れるしかない神に似た「絶対」なのだ。

もう一つ、『ソドムとゴモラ』第1部にあるような、人間たちを植物・動物に置き換える描写もまた、個人の免責としての意味作用を持つ。シャルリュスとジュピアンの二人がまるで蜂が蘭の周囲をまわるようにおたがいの様子をうかがいあう、あの有名な描写は何か妖しい美しさを放ち、自然界にたとえを求めた分だけかえって人間の欲望の生々しさを感じ取らせる。また、特異な欲望の持ち主同士が出会いをとげる不思議さを、雌雄同株の花の受精に託して語るあの叙述もまた、奇妙に説得的な効果を持つ。だが、人間を動植物に重ねるとはひっきょう、人間の責任能力を無化することにほかならない。そしてそこから、道徳的要素も抜き取られていくのだ。

## 開き直るプルースト

このようにプルーストの同性愛意識には、世人と違った欲望の形式を正

当化するための論拠がいくつも見出される。ゲイの運命を嘆く、悲痛な叫びばかりがすべてではない。ユダヤ人であることがかえって、同性愛是認の契機を補強するのだと考えることもできる。さきほどの「夜のまえに」のなかには、「他の女と快樂を見出す女が、異性の人間と快樂を覚える女に比べて道徳的でない——むしろ背徳的だ、とはいえない」という、ごくきっぱりした断定がある<sup>21)</sup>。

プルーストの同性愛意識がどうであったか、簡単に結論の出る問題ではない。もともと、肉欲という無意識につながる奥深い問題に関して、首尾一貫した意識のあり方が成り立つわけでもない。伝記作者ペインターがあまりにも自己の「悪癖」に悩み苦しむプルーストを描きだしたのに反対して、アンリ・ボネのほうはもっと割り切る。プルーストにとって同性愛は「異常」ではあっても「罪」ではなく、彼はけっして快樂と悪を同一視したことがないというのだ<sup>22)</sup>。ボネの言い方もまたやや極端に聞こえるけれど、『消え去ったアルベルチヌ』末尾あたりにあるこんな主張もまた、まぎれもなくプルーストの本音なのだ。「個人的には私は、人が自分の快樂を男のそばで見出そうと女のそばで見出そうと、道徳の見地からまったく無関係であり、自分が見出しうるところにそれを求めに行くのが自然すぎるくらい自然かつ人間的だと思っていた」(Ⅳ, 264)。

ユダヤ人にして同性愛者という二重の宿命を負った人は、昔から数多くいる。十八世紀の美学者ヴィンケルマンは便宜的な理由でカトリックに改宗し、最期は不可解な死を遂げた<sup>23)</sup>。兩次大戦間に生きたモーリス・サックスのほうは、あたかも古来ユダヤ人や「おかま」に与えられる悪しき言説をそのまま一身に引き受けたかのように、不誠実と裏切りの恥辱にみちた一生を送った<sup>24)</sup>。もっと最近では、ゲイとしてもユダヤ人としても、率直に自己のアイデンティティーを追及した、「ウェスト・サイド物語」の作曲家レナード・バーンスタインのような人もいる<sup>25)</sup>。

プルーストはどうかといえ、彼はついに自己の性向を表面に出さず(今

日の言葉でいえば「カミング・アウト」せず), 心に屈折があったにもせよ, もっぱら自己の責任に属さない範囲でしか同性愛を引き受けなかったという印象を与える。卑怯といえは卑怯な姿勢である。彼の同性愛意識をあきたらないとする意見が絶えないゆえんであろう。

たとえばジードはプルーストの自己防御や偽装をきびしく非難し<sup>26)</sup>, 彼のことを「隠蔽の偉大な巨匠」とまでいう<sup>27)</sup>。またサルトルは『聖ジュネ』のなかで, しばしばジャン・ジュネとのかかわりでプルーストの卑怯さを槍玉にあげる。「あのプルースト自身も, 同性愛者たちのことを, それがまるで天然自然の一種族であるかのように語るといういささか卑怯な巧妙さを身につけていた。[……] 男色者は対象物であり, 花であり, 昆虫であり, 古代のソドムかそれとも地上はるかな天王星の住民であり, 脚光をあびて躍っているロボットであり, その他なんであろうとお好み次第のものであるが, しかし, ただわが隣人, わが姿, われその人, であってはならない」。つまりは, 「彼が読者たちとぐるになってしまったことはまぎれもない事実なのだ」<sup>28)</sup>。

プルーストにおいて同性愛が一種の自然現象に化することを非難する点では, ドミニック・フェルナンデスも同じである。「[同性愛の] 起源や原因に無関心な態度がそれにふさわしい唯一の態度になり」, 「プルーストは同性愛の歴史的次元を完全に抹殺してしまう」<sup>29)</sup>。「過去の間人であるプルーストを通して, 十九世紀の偏見や恐怖がふたたび立ち現われる」のだ<sup>30)</sup>。

それにしても, ディエスバックが行なったように<sup>31)</sup>, オスカー・ワイルド事件以後の状況のきびしさはやはり考慮に入れられねばならない。プルーストのおそらくは最初の「恋人」レイナルド・アーンは, かつてその「愛人」であった師, 有名な作曲家サン・サーンスから, この種のスキャンダルをどれほど避けねばならないかよく教えられていたという。それに, オスカー・ワイルドの事件は「ギリシア的」と形容すれば美しい愛の形態

が内実、ひどく醜悪な世界を隠していることを世間に露呈する効果があった。

だがプルーストのほうは、初めからこんな美名を振りかざす意図はすこしもなかった。まして、いわば英雄気取りでもって同性愛を天才の特権のようにみなしたことも一度もなかった。昔から、通常の世界の住人には禁じられた男色も、しばしば例外者たる芸術家の恩典のようにして容認されたのだけれども。

卑怯にみえようとも、自己の性癖の隠蔽とはいいいかえれば社会の尊重、社会と同じレベルに身を置くことにほかならない。たとえばジードのように、同性愛をおおやけにする作家たちには、多少とも優越感、いわば「使徒的」な情熱がつきまといがちなものだ。状況がきびしければきびしいだけ、ゲイを名乗り出るとは美拳となる。それに反してプルーストは、よきにつけあしきにつけ天才意識とは無縁な人間であった。芸術家だから、一般人のモラルや社会的責任を免れるとは彼には思えなかったのである。

### 「就寝劇」について

プルーストにおいて同性愛が深刻な葛藤の場となるもう一つ大きな要素は、母とのかかわりにある。彼は母親によってユダヤ人であり、またもしかして母との関係のあり方が同性愛の原因であったかもしれないのだ。周知のように、フロイト以来、母とのあいだの愛情の屈折が男児を同性愛に導くとの説がしばしば行なわれる。誰にもまして母にこそ隠さねばならない「異常な」性向がほかならず母に由来するとなれば、これは確かに由々しく痛ましい事態ではある。

母親とは、意識下の世界にかかわるとらえにくいテーマである。だが、プルーストの同性愛意識をユダヤの血とのかかわりで調べるとなれば、この問題を避けて通るわけにはいかない。さしあたりここでは、小説『失われた時を求めて』の冒頭に近い、あの有名な「就寝劇」の場面を手がかり

にして議論を進めることにしよう。この挿話には、有益な示唆がいくつか潜んでいるように思えるからだ。

この場面で、毎夜、母から与えられるおやすみのキスがその晩に限って拒否される、その原因を作るのがユダヤ人スワンの来訪だという設定がまず注目すべき一つの事実である。彼は、子供にすればかけがえなく貴重な行為の妨害者である。最終稿では削除されたけれど、草稿の段階で、ユダヤ人嫌いの祖父（あるいは大おじ）が反ユダヤ的言辞を弄することになっていた<sup>32)</sup> のも興味を引く。とくに、長大なエスキスのⅫでは、大おじが友人スワンに面と向かってユダヤ人への警戒の気持ちをあらわにするところがかかなり詳しく述べられている。スワンはこれを軽く受け流し、ユダヤ人種にも美点があることを列挙しながら、やんわり反論を加えるのだが。

スワンがユダヤ人であることは最終稿ではあまり問題にされない。その代わり、父の姿を、わが子を神に捧げるアブラハムにたとえるといった旧約聖書的な要素は最終稿のほうが詳しい。成人となる過程での、社会の「制度」と子供との初めてのぶつかりあいが、このエピソードの含意である。厳正な（しかし子供からみれば不可解・無限抛な）命令の支配するおとなの社会は確かに、旧約聖書のお話を踏まえて語るのにふさわしい。至上の絶対者の直接の君臨からなる、しばしば過酷な世界が旧約聖書的・ユダヤ的世界である。このようなおとな社会の堅苦しい「コード」にむりやり話者を順応させようとする母の、スワンは共犯者である。ユダヤ人であったブルースト自身の母への恨みあるいはわだかまりが、同じユダヤ人スワンを通じて暗示されているのだと考えることも許されるだろう。

しかしこの挿話で、スワンの持つ意味はもっと多岐に及ぶ。何と云っても彼は自由人である。爪弾きされるもと高等娼婦の夫にして社交界の寵児、かつ眼識豊かな芸術愛好家。田舎とパリ、ブルジョワ社会と最高の貴族社会、フランスと外国といった相反する二つの世界を思うままに浮遊するのがスワンである。話者は今、おとな社会と子供社会の、二つのコードの切

り替えに苦勞している。その場面でのスワンの介入は、それぞれの社会のコード体系からまったく自由な一人のユダヤ人への、羨望・嫉妬あるいは敵意を示すものであろう。

だが一方、スワンは話者の最もよき理解者となることができる。話者がいま母を待ちながら寝室で味わっているような種類の、排除・疎外・嫉妬・不安の苦しさを、スワンもまた恋人としてつぶさに経験したことがあるからだ（I, 30-31）。愛する母から（あるいは恋人から）引き離された悲しみは、故郷を失った民の遺棄の意識に通じるだろう。どんなに各社会のコードから自由なユダヤ人といえども、この悲しみから完全に身を解き放つことはできないだろう。そしてそれはいくらか、通常の欲望の持ち主たちのあいだに肩身狭く身を潜めるゲイたちの疎外感とも、共通点を持たずにいないだろう。

#### 母は同性愛の原因となるか

男がなぜゲイになるかについては定説はなく、これまで支配的だった後天説に対して、このごろでは妊娠中の母親にかかるストレスがうんぬんされたりする。むしろ最近のゲイ解放運動のなかでは、これは一つの偶発事、ことさら説明をくだす必要のない「自然」とみなされているようだ。同性愛の原因を究明する必要がないのは、誰も異性愛のそれをあげつらったりしないのと同じだというのである。

だとしても、母との愛情のあり方に同性愛の原因を探るフロイト以来の主張は今なお力を失っていない。母の大きさ（つまり父の希薄さ）を中心に捉えると、いくつもの点で説明がつきやすくなるからだ。子供は母親との強度の固着から母を理想化し、他の女を斥けて心に母のイメージを守りつづけるのだといわれると、たしかになるほどという気がする。フロイトの説は、子供は母と自己を同一化し、母が自分を愛してくれたように今度は自分が他の男を愛するのだ、というところにあるから、同性愛にどうし

てもつきまとうナルシシズムも同時に説明がつく<sup>33)</sup>。

フロイトの説をすこしい替えて、子供は母との絆が強すぎるから、無意識のうちに母（女）はもうごめんだと感じるのだともいえる。また、崇拜と反発とは紙一重であるから、母の圧制のもとで、その子は他の男性を相手に自分の男らしさの証明と補強を求めようとする場合もありうるだろう。

高名な同性愛者に例をとれば、ジュリアン・グリーンなどたしかに早く逝った母への思慕の情を抱きつづけた一人だし、ジードもまた母を純粋な目で見るとあまり、母（女）が快楽の対象になりうることを冒瀆としか考えられなくなってしまった。そのほか、フロイトが分析したレオナルド・ダ・ヴィンチはもちろんとし、母にとってすべての希望の対象であった D. H. ロレンス、グリーンと同じく少年期に失った母への崇拜に生きたチャイコフスキーなど、すぐに何人もの名前が浮かぶ。プルーストの身辺でいうと、ジャン・コクトーもまた自殺した父の不在のなかで、過保護の母によって育てられた。

多くの部分でフロイトと対立するユンクも、この点では意見が近いらしい。また、最近の『ガニュメデスの誘拐』（1989）では原因の解明を無意味とするドミニック・フェルナンデスも、『木、その根まで』（1972）や『薔薇色の星』（1978）においては家族関係を重要視する立場だった。

## 母親の継承

プルーストと母親とのつながりについては、もう語り尽くされた観がある。愛情や冒瀆が入り混じる母と子との葛藤、そして2歳違いの弟ロベールの誕生から来る嫉妬と独占欲の高まり。親子関係と同性愛を結びつける意見は、まるでプルーストのために作られたようにさえ思われる。

だが、プルースト自身が母との屈折を自己の性癖とどの程度関連させていたかはもう一つ明らかでない。母に知られてはならないという思いに苦

しい思いをしたことは確かだとしても、その「倒錯」の由来あるいは責任がほかならず母にあるのだと考えたのかどうか。

作中最大の同性愛者シャルリュスにみられるように、プルーストは同性愛とはまず、男性の女性化、男性にある女性的部分の異常な増大だと考えていた。だから、彼が同性愛傾向を母親でないまでも、女性と結びつける考え方をしてもおかしくない。「倒錯それ自身は、有用な関係を結ぶことができるようにと倒錯者が女性にあまりに接近するところから来るのだ」

(Ⅲ, 30-31) と彼は書く。また、ドミニック・フェルナンデスは「誰の息子でもないプルースト」で、シャルリュスが自分の母を深く愛していたことを語る部分(Ⅲ, 115)をひととき重要視する<sup>34)</sup>。シャルリュスが母のことになると声を詰まらせ、感動をもってしか語れないのだというこの場面について、彼はいう。「ただの一度だけ、プルーストはド・シャルリュス氏の趣味が、その細胞の組織よりはむしろその幼年時代の夜の闇のなかに源を発しているのではないかと考えたらしく思われる」。

何も、ほんらい同性愛の原因が母への執着にあると断定できるわけではない。またプルーストもまた同意見だった、とぜひとも立証しなければならないものでもない。だが、シャルリュスの母親への大きな愛を語る箇所はほかにもあること(たとえば、Ⅲ, 344)をもって、フェルナンデスの推論を補強することはできる。さらに、彼はしだいに母親に似ていく(Ⅳ, 570)。しかも別のところでプルーストは、彼の容姿が母に似通うのを、男たちがよく母親に似た恋人を求めるという行為と同等にみなそうとしているのだ。「シャルリュス氏の外貌と、[……]倒錯者でない場合であっても、息子たちが女を求めながら、彼女たちの顔のうちに自分の母親の冒瀆をなしとげているのだという事実とを、完全に切り離すことができるであろうか」(Ⅲ, 300)。

女性化すなわち同性愛傾向への没入が、一つの冒瀆のようにして、容姿のうえで、自己と母との合体・同一化を引き起こすというのである。それ

に、ゲイが母に似るのはシャルリュスばかりではない。しだいにゲイ傾向を発揮するもう一人のゲルマント家の貴公子ロベール・ド・サン＝ルーもまた、生き写しとっていいほど母マルサント夫人の面影をなぞっていくのである（Ⅳ，280）。

同性愛者の人間像が、プルーストにおいてはずいぶんと母とのつながりで造形されていることがわかる。彼にとって、同性愛とは遺伝あるいは「神経」の問題ではあった。だが、心のどこかで同性愛の由来が母にもあるとの自覚の、かなり近いところまで彼が進んでいたと考えられるであろう。プルーストにおいてもまた、ゲイであるとは、愛であれ冒瀆であれ、何らかの意味での母の継承だとみなされているのだ。

#### 神経症・ユダヤ人・ゲイ

「就寝劇」に戻ろう。母およびユダヤ人のテーマが交錯するこの挿話で、同性愛のテーマも何かのかたちでかかわっているのであろうか。

ヴァリエントでは、スワンとともにヴァントン氏（最終稿でのヴァントゥイユ）が客に来ることになっていた<sup>35)</sup> のが一つの材料になるだろうか。最終稿のようにその娘がレスビアンだと決めつけることはできないが、彼女が「神経質」な「まるで男の子のような」娘だという言及はある。そして、妻を亡くしたヴァントン氏は彼女をひどく甘やかしているのだ。溺愛する親と同性愛者の子というパターンの、小さな（不十分な）実例が「就寝劇」中にはめこまれるはずだった、と考えてよいかもしれない<sup>36)</sup>。

「神経質」といえば、「就寝劇」の主人公もずいぶん神経質である。母のキスをどうしてもあきらめきれない彼の懇請に負け、父の態度変更を受けて、母はついに寝室へ来る。だが、せっかくかちえた母の来訪に、彼は安らぐことができない。母をここまで悲しませたからであり、とりわけ母の譲歩とはすなわち自分の子供状態の継続にほかならないからだ。彼の意志の弱さ・母親との固着が、一つの「意志に基づかない病」（Ⅰ，37）と

して公認されてしまう。コードの切り替えは失敗に終わったのだ。

こんなに母のキスを待ちわびる、もともと神経質な子供の意志の弱さが、「[彼]には責任のない神経の状態 (un état nerveux)」(I, 37) として解き放たれてしまったという事実は大きい。この日、彼の失墜が始まる。正常なおとなへの移行はお預けとなる。

この部分では同性愛のことは、何も言及されてはいない。だが、母への強度の固着と同様、彼にとって同性愛もまた「神経」の問題であった。「夜のまえに」の言葉でいえば、「神経の変質」に起因するのであった。母親との固着を断ち切れないうまま、神経症的状态に留め置かれる話者は、このとき同性愛というもう一つの「神経の状態」に向かっても、「失墜」を運命づけられたといえないだろうか。そしてこの夜、心弱くも子供の要求に屈した母は、彼の神経症に近い愛情への飢えを助長することによって、子供の同性愛傾向に加担したのだということにならないだろうか。プルーストが同性愛の起源に母の影響を多少とも認めていたのだとすれば、「就寝劇」はこの点でも母への間接的な非難あるいは悲しみの表現として読めるのではないだろうか。

少なくとも、「就寝劇」が表わすような状況には、一人の同性愛者が生まれる条件がよく備わっているように思える。

一方、「神経の状態」としてのこのような愛情の飢えは、前にみた疎外感・遺棄感とのつながりとして、ユダヤ人たることとまったく無関係だとはいえない。

たとえば、ジャン・ルカナティは著書『マルセル・プルーストのユダヤ的プロフィール』のなかで、ユダヤ人の意識が愛情の問題としても、プルーストの奥に深く淀んでいたことをしきりに語る。「ぼくはユダヤ人だから愛に値しないのだ」という思いが彼のどこかにわだかまっており、プルーストの神経症はユダヤ人意識の上に出来上がっていたのだとまで彼はいう。「あらゆる烙印の跡のなかでも、ユダヤ人たることこそ消え去らない

唯一のものだ。ユダヤ人はユダヤ人であることのなかに絶えず落ち込んでいく、いわばシシュフォスなのだ。彼にとってもっとも頼りになる支柱といえども、つねに手から擦り抜けていく」<sup>37)</sup>。「プルースト夫人の死も、ユダヤ人意識を消えさせはしなかった。それは恨みを無くしはした。神経症は残る。[……] それはユダヤ人意識にくっついていて、ユダヤ人意識が神経症に対して固定点の役目を果たしていたのだ」<sup>38)</sup>。

愛情の渇きや神経過敏傾向は、自分でもユダヤ人であったバンジャマン・クレミューがユダヤ人の特性を列挙するなかにある<sup>39)</sup>。交感神経の病的過敏は、ユダヤ系の人間のあいだによくみられるのだという。

つまるところ、プルーストにおいて、同性愛、母への屈折、ユダヤ人意識という三つのテーマは、「神経症傾向」のなかに合流するのだと考えることができる。すなわち、いずれもが深く心に食い込み、人格の基礎にかかわり、場合によれば神経の全体を揺るがしかねない困難な問題をはらんでいるのだ。これら三つが相互に高めあい牽制しあって、心にいくつものドラマを生み出していくのだ。

むろん、問題はあくまでプルーストの感じ方にある。こうした結びつきが普遍的に成り立つかどうかは別問題である。同性愛が「神経」に発するという見方にしながら、すでに大いに議論の余地を残す。けれども、変則的であればあるだけ、欲望の及ぶ範囲は限りなく深い。世に隠れた同性への欲望は心の奥によどみ、遠い幼児期の体験ばかりか、はるか一民族の歴史と心性にも達するのであろう。

## 残された問題

ユダヤ人であることとからめてプルーストの同性愛意識を調べる仕事は、まだまだ考慮すべき余地を残す。本稿では、まだ作品自身にあまり立ち入っていない。『ソドムとゴモラ』でのユダヤ人ブロックの姉妹たちや、そのおじニッサン・ベルナール氏の所業。ユダヤ性という点からみたシャ

ルリュスの特性。あるいはまた、バルベックのホテルの場面での、ラシーヌの戯曲『エステル』と『アタリー』のひんばんな引用。問題点は多い。

プルーストが同性愛がらみでラシーヌの旧約＝ユダヤ的作品をしきりに引くことにしても、フェルナンデスのいうように、人々の憤激を買う主題を「永遠の相」のもとに考察するという彼の逃避的姿勢だけで説明できるだろうか。また、反ユダヤ的立場を誇示するシャルリュスが、一面ひどくユダヤ寄りなのはどうか。これらの問題は他日、稿をあらためて考えることにしたい。

ただ本稿の終りに、一般論として、同性愛者とユダヤ人の問題にもうすこしこだわっておこう。両者は外部からみて同一化されやすいばかりでなく、内在的に何かの連関を持つのかどうか。今みたように、プルーストにおいては神経症気質という点で同性愛とユダヤ人性とがつながる。だとすれば、論理的には、ユダヤの人たちはゲイになる条件を多分に備えていることになる。だが、プルーストにおいて成り立つことがユダヤ人一般にあてはまるとは限らない。反ユダヤ的な言説では、よく濡れ衣を着せられるけれども。

一方、論文「『失われた時を求めて』におけるユダヤ人と同性愛者」のなかで、ジャンヌ・バンはフロイトの主張においては、反ユダヤ主義と女性への嫌悪とが去勢コンプレックスという共通の枠組みに位置づけられることに注意を向けた<sup>40)</sup>。たしかに、女性にペニスがないことへの嫌悪あるいは恐怖が子供を女嫌い、ひいては同性愛に導くとは、フロイトの基本的な意見の一つである<sup>41)</sup>。また、ユダヤ人増悪の大きな原因が割礼の習慣にあることも、彼の認めるところである。割礼が無意識のうちに去勢と同一視されるからだ<sup>42)</sup>。となると、去勢不安を仲介として、同性愛と反ユダヤ主義とが結び合うことになる。ユダヤ人嫌いの人から見れば、ユダヤの人々は何かしらめめしさを感じさせるらしい。割礼＝去勢＝女性化という連想が成り立つとすれば、この心理も説明がつく。

そういわれればたしかに、ユダヤ人増悪と、男らしさの誇示あるいは男色傾向のあいだには通じるものがあるように思える。ユダヤ人嫌いだったワグナーの音楽は、ゲイたちに何やら隠微な魅惑をふるうのだという。徹底したユダヤ人増悪に立つナチズムもまた、同性愛者に迫害を加える一方、内部に否定しようもなく男色的原理を含んでいたのだった。ユダヤ人を差別することによって、もう一つの差別の対象である、ほかならぬゲイに近づいていったのだとすれば、これはとても皮肉なことだけれど。

ところでもし、こんな反ユダヤ主義が自分に向かって働いたとしたらどうだろうか。つまり、自分がユダヤ人たるのを恥じ憎むユダヤ人がいたとして、その人の心のなかにも、去勢コンプレックスから女性増悪・同性愛への動きが生じるのだろうか。ジャンヌ・パンは何もふれないし、フロイトがこの点を問題にしたとも聞かない。「割礼」を恥じるユダヤ人は少なくないであろう。とすれば、この点でもユダヤ人はゲイになりやすいという結論になる。

だがフロイトがつねに正しいわけではない。これもまた、さきの神経症うんぬんと同様、事実による裏づけを得ない、単なる論理だけの話かもしれない。

## 注

- 1) 三島由紀夫『禁色』新潮文庫, p. 130.
- 2) ジャン・コクトー (曾根元吉訳)「白書」,『ジャン・コクトー全集』第3巻, 東京創元社, p. 372.
- 3) ミッシェル・フーコー (増田一夫訳)『同性愛と生存の美学』哲学書房, 1987, p. 55.
- 4) ジョン・ボズウェル (大越愛子・下田立行訳)『キリスト教と同性愛・1~14世紀西欧のゲイ・ピープル』国文社, 1990, p. 41.
- 5) Henri Bonnet: *Les amours et la sexualité de Marcel Proust*. Nizet, 1985. p. 31. なお, François Porché (1877-1944) は詩人・劇作家にして, ボードレールやヴェルレーヌを論じた研究家であるとともに, 文学における同性愛を論じた先駆的な著書 *L'amour qui n'ose pas dire son nom* (1927) でも知られる。

- 6) 拙稿「戦争と同性愛—ジュピアンのホテルの場面から」(『プルースト研究会報告』22号, 1992年12月)を参照。ただ, 軍隊と同性愛との関係はもうすこし複雑である。ゲイであったとの噂の高いナポレオンは同性愛を敵視しなかったし, フロイトは社会集団の形成における, 相互同一視にもとづく同性愛的結合の役割に注目した。美少年を集めたヒトラー・ユーゲントのように, ナチズムが集団に魅力を添えるために巧みに男色的な要素を加えたことも知られる通りである。
- 7) ドミニック・フェルナンデス (岩崎力訳)『ガニユメデスの誘拐・同性愛文化の悲惨と栄光』ブロンズ新社, 1992, pp. 49-50。
- 8) 若いシャテルロー公爵は関係のあった下僕とゲルマント家のサロンでばったり顔を合わせて, きまりのわるい思いをし (Ⅲ, 37), ゲルマント大公もまたモレルと一夜を過ごし (Ⅲ, 464), ブロックのおじニッサン・ベルナール氏のほうはバルベックのホテルでボーイたちと仲良くなる (Ⅲ, 236など)。
- 9) ドミニック・フェルナンデスの前掲書, p. 49。
- 10) 工藤庸子『プルーストからコレットへ—いかにして風俗小説を読むか』中公新書, 1991, pp. 104-105。
- 11) 当時の同性愛文学については, たとえばプレヤード新版『ソドムとゴモラ』の, Antoine Compagnon による Notice を参照 (p. 1260)。
- 12) 1900年代初めごろ世間を騒がせた同性愛事件については, Jeffrey Meyers: *Homosexuality and Literature 1890-1930* (The Athlone Presse, 1987) に簡潔な記述がある (pp. 8-9)。プルーストがとくに関心を寄せたオイレンブルク事件のことは, 前注の Antoine Compagnon の Notice に詳しい (pp. 1196-1202)。余談であるが, 三島由紀夫が絶賛したヴィスコンティの映画「地獄に墜ちた勇者ども」は, クルップ家をモデルにしているのだという。
- 13) しかし「私」が, 時おりゲイそっくりの反応を示すことも確かである。このことは, 拙稿「男爵パラメード・ド・シャルリュスの快楽・プルーストにおける同性愛現象の一面」(『フランス言語文化の基底と表層』大阪外国語大学フランス研究会, 1993) で少しふれた。
- 14) ジェフリー・メールマン (内田樹ほか訳)『巨匠たちの聖痕・フランスにおける反ユダヤ主義の遺産』国文社, 1987, p. 209。この本は, 二十世紀のフランスの作家たちに潜在する反ユダヤ人意識を精緻に分析して興味ぶかい。なお, プルーストをユダヤ人という観点で論じた著作では, 鈴木道彦「あるユダヤ意識の形成」(『プルースト論考』筑摩書房, 1985) の上に出る仕事は, たぶんフランスでもなされていないと思う。
- 15) メールマンの前掲書, pp. 45-46。
- 16) 同上書, p. 71。
- 17) ミッシェル・フーコーの前掲書, p. 167。

- 18) Jean Recanati: *Profils juifs de Marcel Proust. Editions Buchet/Chastel*, 1979. pp. 11-13.
- 19) プルーストが遺伝を原因とみていたことが察せられる部分としてほかに、若きフォワ大公が父と同じ性向を持つことについて (N, 407), シャルリュスから甥サン＝ルーへの遺伝的形質の伝達について (N, 265 および III, 95)。
- 20) «Avant la nuit» in *Jean Santeuil, précédé de Les Plairs et les Jours*, Bibliothèque de la Pléiade. p. 169.
- 21) 前掲書の同じページ。ただし、この作品の色調はむしろ暗く、必ずしも正面切って同性愛を擁護しているわけではない。「若い娘の告白」と同様、これもまた自殺をはかった女の死の直前の告白として書かれている。
- 22) Henri Bonnet: «La biographie de Painter» in «Bulletin de la Société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray», No 17, 1967.
- 23) ヴィンケルマンがカトリックに改宗したのは、そのほうがローマで仕事を進めやすかったからだといわれる。また彼の死をめぐる興味ぶかい推理として、ドミニック・フェルナンデスの小説『シニョール・ジョヴァンニ』(田部武光訳, 創元推理文庫)。
- 24) モーリス・サックスについては『ガニユメデスの誘拐』の訳注に、訳者岩崎力氏の簡にして要を尽くした解説がある (p. 361)。彼が自己を赤裸々に語った驚くべき自伝 *Le Sabbat, souvenirs d'une Jeunesse orageuse* (Corrêa, 1946) には、聞き書きだけれど、プルーストについてのエピソードも語られている。
- 25) 「ウェスト・サイド物語」は最初、ユダヤ人とカトリックの対立として構想されたという。井上保『モーヴ色の肖像』(現代書館, 1993) を参照。
- 26) ジードの『日記』の、1921年12月2日の頃。
- 27) 同上, 1927年10月1日の頃。
- 28) サルトル (白井浩司・平井啓之訳)『聖ジュネ・殉教と反抗』新潮文庫, 下巻, p. 436。
- 29) ドミニック・フェルナンデス (岩崎力訳)「誰の息子でもないプルースト」,『木, その根まで』朝日出版社, 1977, p. 331。
- 30) 『ガニユメデスの誘拐』, p. 55。
- 31) Ghislain de Diesbach: *Proust*, Librairie académique Perrin, 1991. p. 198.
- 32) Esquisse VIII (pp. 665-668) および Esquisse XII (pp. 679-694) において。
- 33) 「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」,『フロイト著作集』第3巻, 人文書院, pp. 118-119。
- 34) 『木, その根まで』, p. 338。
- 35) I, 13 のヴァリエーション a. (p. 1097)。
- 36) 名高いモンジュヴァンのエピソードで、話者が窓の外から目撃するのは実は父とヴァントゥイユ氏との同性愛行為ではないか、とはなはだ大胆な仮説を立

てた研究者もいる。Viviane Forrester: «Marcel Proust: le texte de la mère» («Tel Quel», hiver, 1978) を参照。

- 37) 前掲書, p. 66。
- 38) 同上書, p. 68。
- 39) 生島遼一「グレコの肖像画」, 『フランス小説』創元社, 1951, p. 251。
- 40) Jeanne Bem: «Le juif et l'homosexuel dans *A la recherche du temps perdu*» in «Littérature», No 37, 1980. p. 105.
- 41) 前掲の「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」のほか, 「嫉妬, パラノイア, 同性愛に関する二, 三の神経的機制について」(『フロイト著作集』第6巻), 「幼児期の性器体制」(同, 第11巻) など。
- 42) 前注の「レオナルド・ダ・ヴィンチ」論文の, p. 115, 注2。